

岡村忠夫教授定年退職記念号に寄せて

武藤, 博己

(出版者 / Publisher)

法学志林協会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法学志林 / 法学志林

(巻 / Volume)

101

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

4

(発行年 / Year)

2004-02-27

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003568>

岡村忠夫教授定年退職記念号に寄せて

私が岡村先生にはじめてお会いしたのは、先生が二四年間お勤めになった第一教養部から法学部政治学科に移られた一九八五（昭和六〇）年四月であったが、それは私が新任の教員として法学部政治学科に着任したときでもあった。それから一八年が経過したが、先生は健康を理由として定年延長を中止され、悠々自適の生活に入られることになった。

先生は、一九三四（昭和九）年六月二四日に東京の中野でお生まれになり、二歳から五歳までの三年間は満州で過ごされたが、その後世田谷に戻り、国民学校（小学校）、新制中学で学ばれた。一九五四（昭和二九）年、東京大学文Iに入学され、一九五八（昭和三三）年東京大学教養学部教養学科アメリカ科を卒業された。一九五八（昭和三三）年四月に東京大学大学院社会科学研究所政治専門課程修士課程に進まれ、一九六〇（昭和三五）三月に修了され、四月からは東京大学大学院法学・政治学研究科政治専門課程博士課程に進まれた。その年の一〇月からシカゴ大学大学院政治学部博士課程に留学され、二年後の一九六二（昭和三八）年九月に帰国された。東京大学大学院法学・政治学研究科政治専門課程博士課程で研究を続け、一九六五（昭和四〇）年三月に課程修了、一九六五（昭和四二）年九月に法学博士の学位を授与された。

その間、留学から戻られた一九六二年一〇月から国際基督教大学教養部社会科学科助手、博士課程を修了された一九六五年四月から同大学教養部社会科学科講師、二年後の一九六七（昭和四二）年から同大学教養部社会科学科助教

授になられた。しかしながら、大学紛争の後、学生処分をめぐって教員間に意見の対立が生じ、先生は辞表を出され、大学教師そのものをやめる決心もなされたが、一九六九（昭和四四）年六月に東京大学教養学部付属アメリカ研究資料センター助教となられた。一九七一（昭和四六）年四月より法政大学第一教養部助教となられ、一九七四（昭和四九）年より法政大学第一教養部教授になられた。その後、一九七五（昭和五〇）年九月から二年間、ミシガン大学大学院政治学部研究員として留学され、帰国されてからの一九八五年、法政大学法学部に移籍された。

一九九〇（平成二）年四月から法学部長および評議委員をされ（一九九一年三月まで）、一九九一年四月から財団法人櫻田会審査委員（一九九八年三月まで）、一九九六（平成八）年四月から法政大学図書館長および評議委員（二〇〇〇年三月まで）を務められた。二〇〇〇年四月から定年延長され、本年三月に退職された。

先生の博士論文のテーマは、「現代社会における〈統治〉と〈抵抗〉」（未公表）であるが、その後の研究業績は、一貫して〈政治意識〉の問題に取り組んだものである。その発端は、シカゴ大学留学時代に、「シカゴ学派」と呼ばれる心理学を取り入れた政治学の研究に関心を持たれたからである。アメリカの子どもたちがいなくアメリカ大統領のイメージと日本の子どもたちがいなく総理大臣についてのイメージが大きく異なることに驚かれ、留学中にイーストン（David Easton）から、日本の子どももの政治的社会的調査を依頼されたことが契機となっておられる。最初の公表論文は、「投票行動に現れた農民の政治意識」（『農業協同組合』一九六七年四月号）であり、その後も政治意識や政治的社会的問題に取り組まれてきた。一九六八年には、David Easton, *A Framework for Political Analysis*, Englewood Cliffs, N. J. Prentice-Hall, 1965 を翻訳され、みすず書房から『政治分析の基礎』として、出版された。一九六九年には、「政治家像の形成——ナショナルとローカルのばあい」（安江明夫氏との共同論文、『都市問題』

一九六九年九月号所収)、「アメリカにおける政治的社会化研究——D・イーストンの研究を中心に」(『アメリカ研究』No.3所収)、および「政治的社会化における〈民主主義〉と〈平和〉」(『社会科学ジャーナル』一九六九年八月号所収)の三本の論文を発表された。一九七一年には、「現代日本における政治的社会化——政治意識の培養と政治家像」(『現代日本における政治態度の形成と構造』(年報政治学一九七〇)、岩波書店、一九七一年)を発表された。

私をはじめ先生の論文に出会ったのは、『現代行政と官僚制』(下、東京大学出版会、一九七四年)に掲載されている「政治意識の基底としての総理大臣像——現代日本における子どもと政治」であった。この本は、私の恩師でもある辻清明先生の還暦記念論文集として編まれたもので、当時研究を始めたばかりの私にとっては、最先端の行政学研究論文集として座右の書でもあった。

その後も、先生は「政治意識」についての研究を続けられ、子どもや青年層の政治意識の問題を研究され、『大百科事典』(平凡社、一九八五年)に「政治的社会化」や「政治文化」、「イーストン」などの項目を執筆されたり、『政治学の基礎概念』(年報・政治学、一九八一年)に「意識」の項目を執筆されたり、また『社会学事典』(弘文堂、一九八八年)に「政治意識」、「政治的無関心」、「政治的社会化」などの項目を執筆されたりしておられる。

一九九〇年代に入ると、松本正生氏(法政大学大学院政治学専攻出身、現埼玉大学経済学部教授)との共同論文という形の研究業績が多くなる。例えば、「政治的社会化における連続と不連続(一)(二)」(『法学志林』一九九五年二月号、一九九六年三月号所収)や「政治態度の連続と変容——未成年から成年への政治意識の流れ(一)(二)」(『法学志林』二〇〇一年三月号、二〇〇二年一月号所収)である。長期にわたるお弟子さんとの共同研究が可能であるということは、先生のお人柄をよく表していると思われる。

昨年、名譽教授記をお持ちするために、先生の世田谷のご自宅をお訪ねした際、きれいに整理された書齋に案内され、術後の経過も順調とのこと、お元気な先生にお会いすることができた。数年前に、大学の研究室を訪ねた際も、きれいに整理された研究室だったことを記憶している。これも先生のお人柄を表していると思う。

今後も悠々自適の合間に、「政治意識」の研究に取り組み、ますますのご活躍をお祈りしたい。

法学部長 武藤博己